

1. 概 要

(1) 気象状況

大型の強い勢力をもった台風17号は時速15～20kmのゆっくりした速度で北上して9月9日沖繩奄美大島を暴風圏内に巻き込み、10日18時頃から12日3時頃まで鹿児島県の南西海上に停滞した後、13日午前1時40分頃長崎市附近に上陸、スピードを早め、同日朝玄海灘から日本海へ抜けた。この九州の南西海上に台風が停滞している間に台風の東側に位置する本県は、南の湿った空気が流れ込み、県内全域に記録的な豪雨をもたらした。

13日昼頃には、暴風雨圏が消滅し、並台風となり、13日夕方には雨脚がよわまったのである。

(2) 降雨状況

内海ダム（内海ダム）では、昭和51年9月8日、11時から降り出し始め、9月11日の10時頃から急に雨脚がはげしくなり、9月11日、24時までの24時間の連続雨量はなんと758mmに達し、そのうち11日の20時～21時間の1時間の雨量は、88mmと云う当地最大の降雨記録を示し、内海ダム附近に大きな災害のつめ跡を残して、13日17時に降りやんだのである。

このように本土を襲うとみせて、洋上に停滞し、上陸の5日も前から豪雨をもたらした台風17号は、観測史上異常なものであったと云われている。

内海ダムでの雨量記録

9月8日 11時～降りをはじめ。
 9月9日 23時～継続的に強く盛りはじめ
 9月11日 0時 | の間、豪雨が続いた。
 12日 8時

㊦ 特に9月11日の20～21時（1時間）での雨量88mmのとき、池田町大池が決壊した。

㊦ 11日の23～24時（1時間）での雨量47mmの時。池田町谷尻地区で土石流が発生した。

過去の記録との比較（内海ダム）

	過 去		17号台風	
	発生年月日	雨量	発生年月日	雨量
連続雨量	S.40.9.9 S.40.9.17	430mm	S.51.9.8 S.51.9.13	1,275.5mm
時間雨量	S.50.8.23	67.5	S.51.9.11	88.0
日最大雨量			S.51.9.11	708.0

連続雨量での最大は、土庄町灘山地区で、1,433mmに達し、わずか5日間で1年分の雨が降った勘定になる。

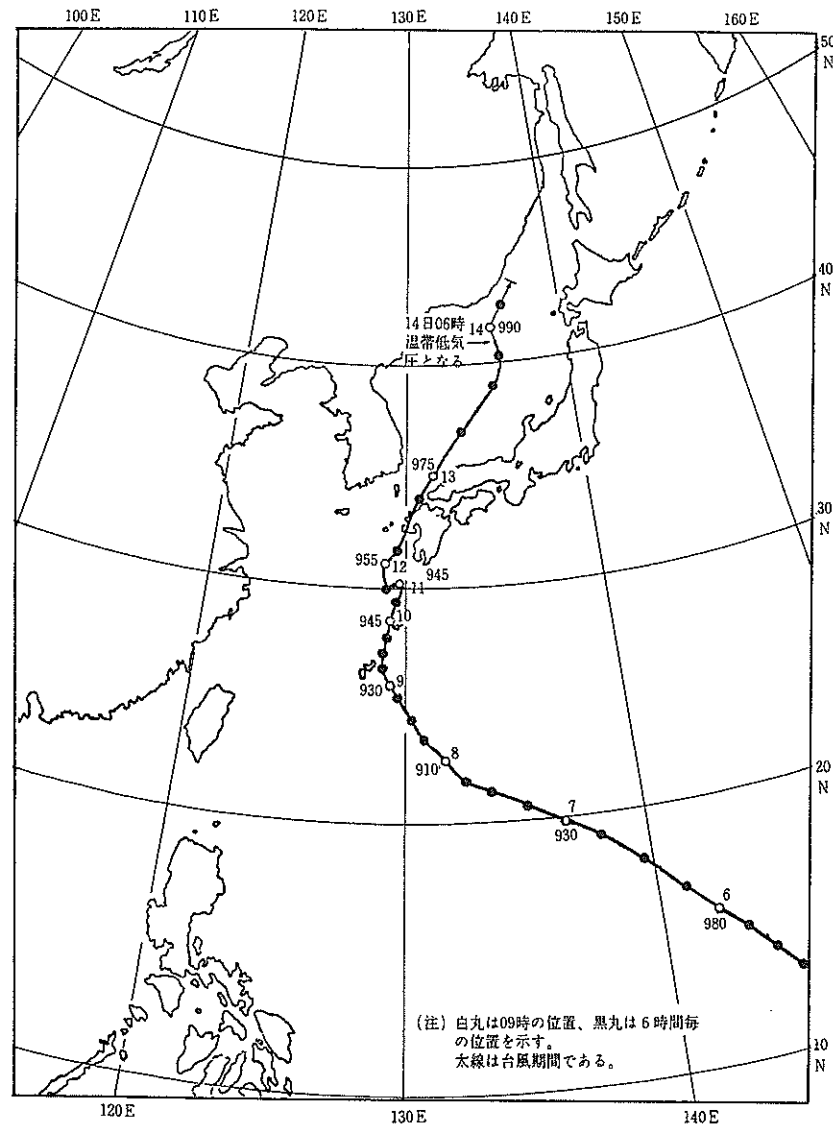
(3) 被害状況

今回の台風17号は全島にわずか5日間で1年分（年間平均雨量1,185mm）という異常降雨のなかで島の地質は風化花崗岩の真砂土地帯という特殊性のため、随所で山腹崩壊による土石流並びに崖くずれが発生し、家屋と共に人命も押しつぶされという悲惨な災禍があり、池田町谷尻地区の24名他39名の犠牲者のほとんどが土石流等によるものであった。

また、記録的な豪雨は池田町池田大川、競川、内海町安田大川、中筋川、別当川をはじめ中小河川が河積が狭く、延長も短いため、上流部で発生した土石流のため下流部では荒堀した土砂が堆積したため、各河川は堤防を越水した。そのため、越水した濁流により池田町、内海町の中心部のほとんどが水没するなど三町合計で床上浸水2,231戸、床下浸水2,940戸に及び、また農地も冠水したため甚大な被害を与えた。

そのため、三町に災害救助法が適用され、自衛隊並びに消防団による救援活動並びに災害箇所への応急措置が行なわれた。

2. 台風17号の経路図

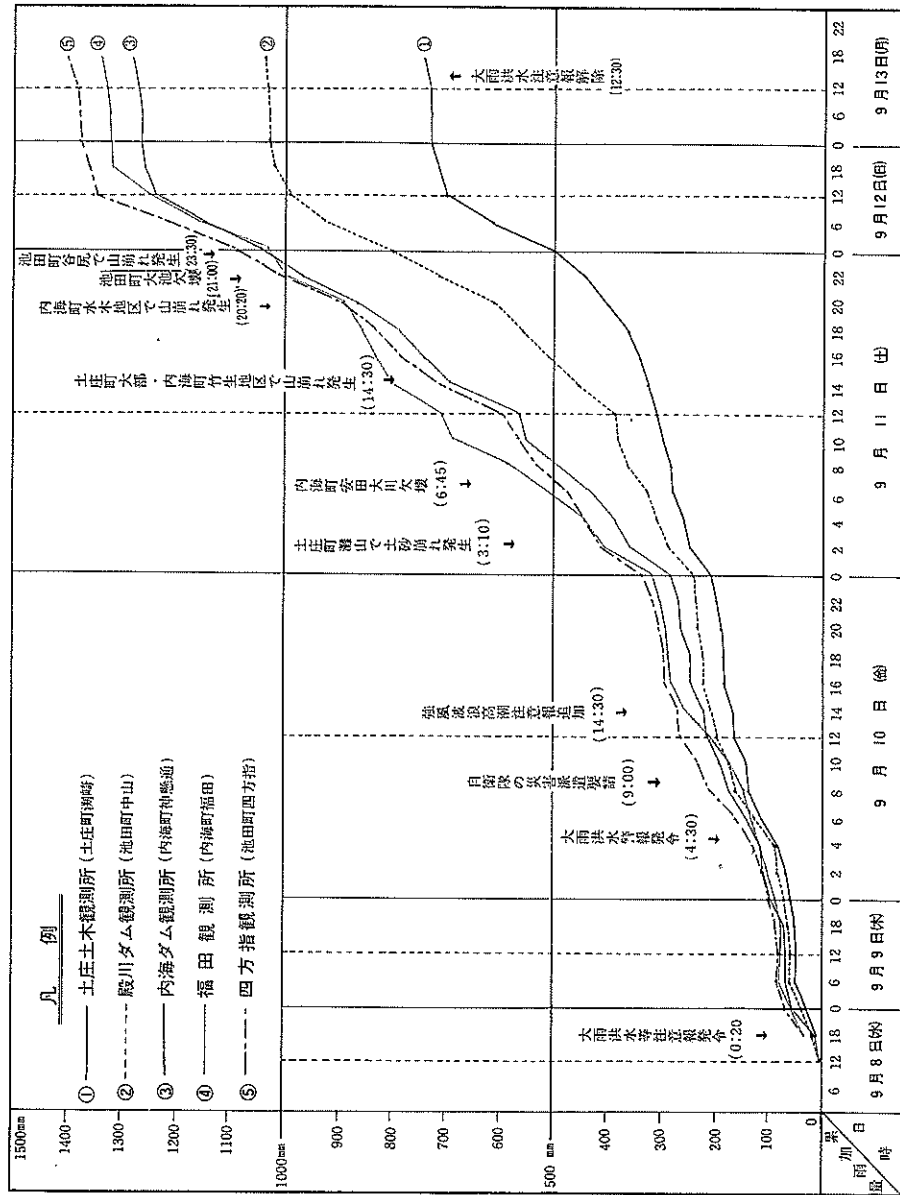


3. 小豆島各地の雨量状況

観測所	所在地	連続総雨量			日最大総雨量(24時間最大)		時間最大雨量	
		雨量	降り始め日時	降り終り日時	雨量	時間帯	雨量	日時
土庄土木	小豆郡土庄町湊崎	749	9月8日13:00	9月13日15:00	390.5	9月11日12:00 9月12日12:00	45.0	11日22:00 23:00
殿川グム	小豆郡池田町中山	1,043	9月8日12:00	"	609.0	9月11日7:00 9月12日7:00	95.0	11日20:00 21:00
四方指	小豆郡池田町四方指	1,401	9月8日12:00	"	754.0	9月11日0:00 9月11日24:00	85.0	"
内海グム	小豆郡内海町神懸通	1,275.5	9月8日11:00	9月13日17:00	738.0	"	88.0	"
福田支所	小豆郡内海町福田	1,287.5	9月8日11:30	9月13日15:00	723.0	9月11日1:00 9月12日1:00	77.0	11日8:00 9:00
四望頂	小豆郡内海町四望頂	1,376	9月8日11:30	"	771.5	9月11日0:00 9月11日24:00	70.0	11日13:00 14:00
豊島	小豆郡土庄町豊島唐櫃	528.5	9月8日11:40	9月13日14:00	258.0	9月11日11:00 9月12日11:00	34.0	11日15:00 16:00
灘山	小豆郡土庄町灘山	1,133	9月8日11:00	9月13日15:00	778.0	9月11日1:00 9月12日1:00	76.0	11日7:00 8:00
小豆島消防署 内海分署	小豆郡内海町安田	1,334.0	9月8日11:00	"	825.0	9月11日1:00 9月12日1:00	94.0	11日19:00 20:00
大部支所	小豆郡土庄町大部	1,340.0	9月8日13:00	"	770.0	9月11日11:00 9月12日11:00	80.0	11日13:00 14:00
坂手公民館	小豆郡内海町坂手	不明 12日1時まで 1,183.5mm	9月8日13:00	不明	841.0	9月11日0:00 9月11日24:00	100.0	11日20:00 21:00
岩ヶ谷	小豆郡内海町岩ヶ谷	不明 12日10時まで 1,325.5mm	9月8日10:00	不明	735.0	9月11日0:00 9月11日24:00	90.0	11日7:00 8:00

△ 一 口 メ モ

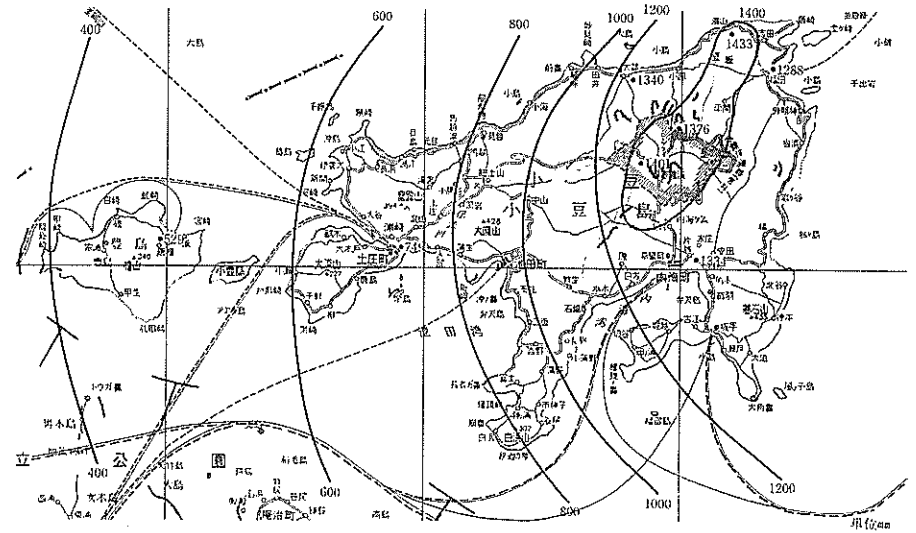
香川県の平年降雨量（昭和16年から昭和45年平均）は1,185ミリ。ところが四方指の1,401ミリを最高に島内各地でこのラインを大中に上回り、わずかに5日間だけで1年分の降雨を記録したことになる。また連続降雨量記録は昭和40年9月9日から17日までの9日間の塩江町椀川での687.5ミリ、日雨量も引田の425ミリ（昭和45年8月14日）、時間雨量も昭和49年7月6日の引田の76ミリという過去の最高記録も軽く突破している。



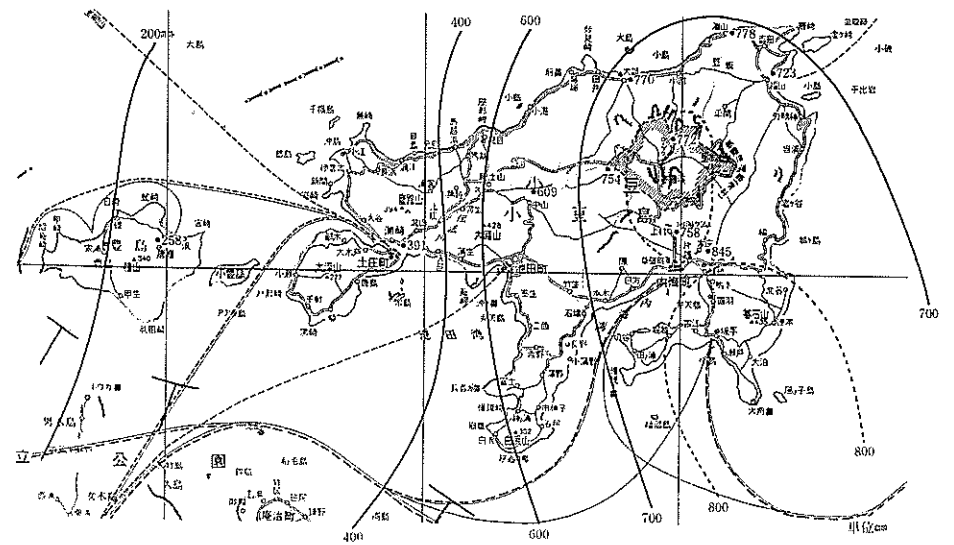
4. 台風17号による小豆島の雨量曲線図

(昭和51年9月8日～昭和51年9月13日)

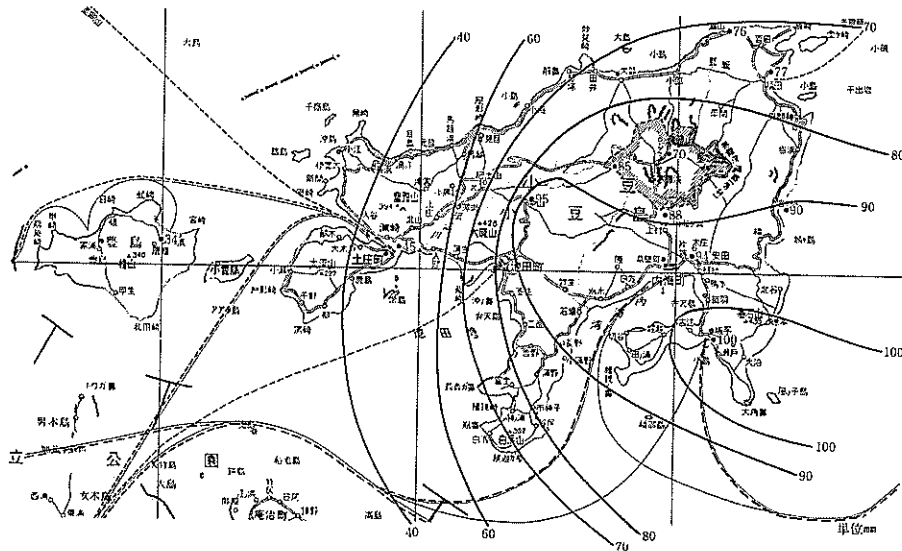
(1) 連続降雨量



(2) 日最大雨量 (24時間最大)



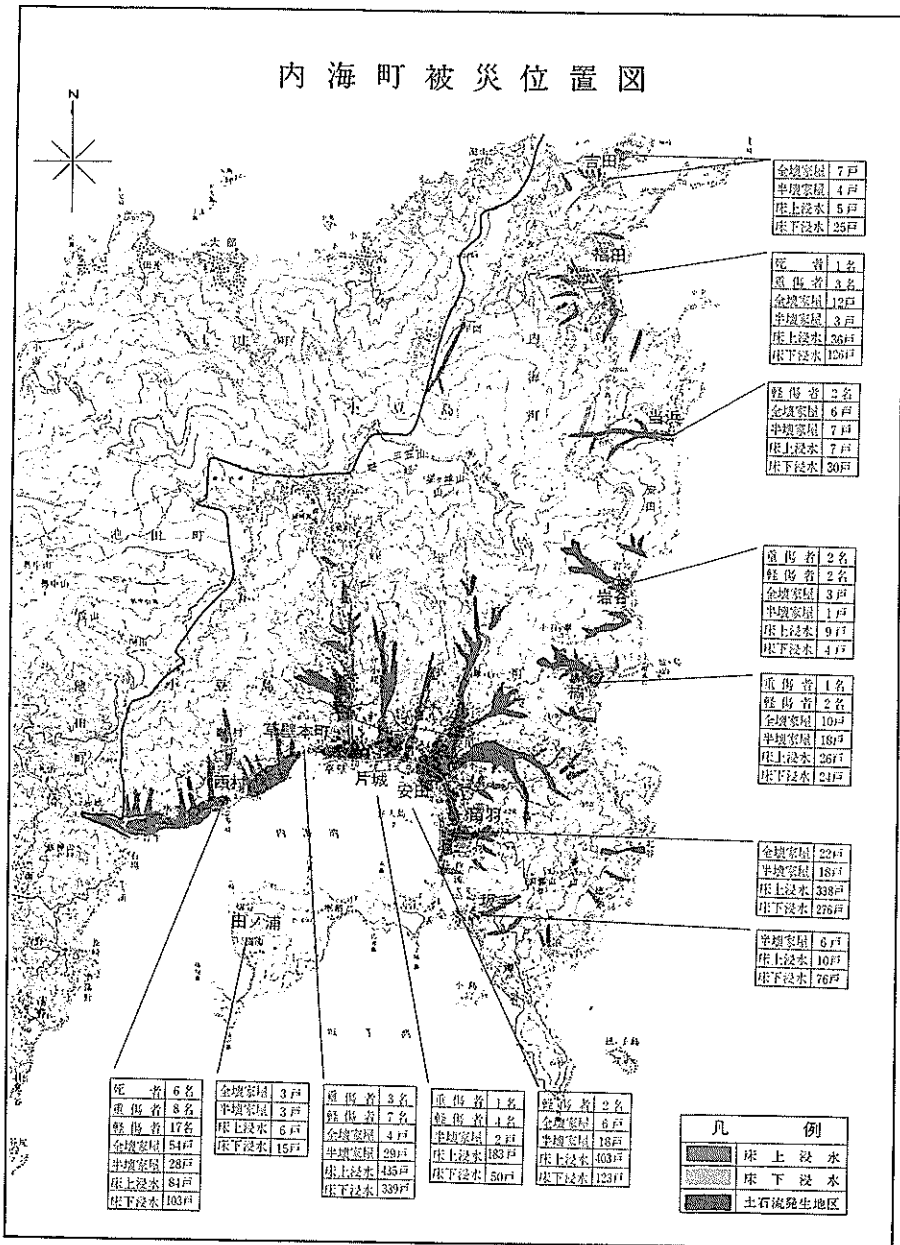
(3) 時間最大雨量



5. 小豆島の被害状況

(1) 一般被害

町名	被害項目 地区名	死者 名	重傷者 名	軽傷者 名	全壊家屋	半壊家屋	床上浸水 戸	床下浸水 戸
土庄町	土庄	—	3	1	3	2	38	81
	湊崎	—	—	—	—	1	58	104
	大鐺	—	—	3	—	—	3	80
	北浦	—	—	—	5	4	16	70
	四海	—	—	—	—	2	20	46
	豊島	—	1	—	—	—	11	87
	大部	4	—	1	17	10	73	255
計	4	4	5	25	19	219	723	
池田町	池田	—	—	4	9	6	292	351
	蒲生	—	—	—	—	—	53	145
	中山	—	—	1	3	13	10	109
	二生	4	4	9	22	11	70	184
	三都	24	4	6	23	11	44	237
	計	28	8	20	57	41	469	1,026
内海町	西村	6	8	17	54	28	84	103
	草壁本町	—	4	11	4	31	618	389
	坂手	—	—	—	—	6	10	76
	苗羽	—	—	—	25	21	345	291
	安田	—	—	2	6	18	403	123
	橋	—	1	2	10	18	26	24
	岩ヶ谷	—	2	2	3	1	9	4
	福田	1	3	2	18	10	43	156
	吉田	—	—	—	7	4	5	25
計	7	18	36	127	137	1,543	1,191	
総計		39	30	61	298	247	2,231	2,940



(2) 公共土木施設被害 (土庄土木事務所関係)

(金額単位:千円・実施率%)

事業種別	内訳	全 体		51年度実施事業		備 考	
		箇 所	事 業 費	箇 所	実 施 額		実施率
災害復旧事業	河 川	130	(2,214,291) 1,425,535	46	(297,567) 174,967	(8.1) 12.3	全体事業費 4,107,420 災害費 3,995,247 土捨場費 112,173 ()は助成事業費 関連事業費分を含む
	道 路	451	2,639,277	182	1,005,108	38.1	
	橋 梁	3	9,221	2	5,954	64.6	
	砂 防	8	33,387	3	13,058	39.1	
	計	592	(4,896,176) 4,107,420	233	(1,321,687) 1,199,087	(20.8) 29.2	
災害復旧助成事業	港 湾	9	75,277	4	30,548	40.6	池田大川 ((1)) (228,254) 610,269 ((1)) (51,600) 183,600 (22.6) 30.1 別当川 ((1)) (185,943) 501,943 ((1)) (9,000) 81,000 (4.8) 16.1 片城川 ((1)) (119,100) 282,100 ((1)) (30,000) 66,000 (25.2) 23.4 中筋川 ((1)) (230,850) 800,850 ((1)) (30,000) 150,000 (13.0) 18.7 計 ((4)) (764,147) 2,195,162 ((4)) (120,600) 480,600 (15.8) 21.9
	池田大川	((1))	(228,254) 610,269	((1))	(51,600) 183,600	(22.6) 30.1	
	別当川	((1))	(185,943) 501,943	((1))	(9,000) 81,000	(4.8) 16.1	
	片城川	((1))	(119,100) 282,100	((1))	(30,000) 66,000	(25.2) 23.4	
	中筋川	((1))	(230,850) 800,850	((1))	(30,000) 150,000	(13.0) 18.7	
災害関連事業	((1))	(24,609) 52,600	((1))	(2,000) 10,000	(8.1) 19.0	()は災害費	
河川激甚災害対策 特別緊急事業	1	1,410,000	1	200,000	14.2	全体堰堤工72箇所 流路工8箇所 ()は災害費	
緊急砂防事業	80	9,232,380	36	2,427,480	26.3		
緊急傾斜地崩壊 対策	12	230,000	12	229,500	99.8		
計	694	17,302,839	286	4,209,215	24.3	()は災害費	

(3) 路線(河川)別の被害状況

(金額単位千円)

区分	路線(河川)名	箇所	全体事業費	51年度 災害箇所	51年度事業費	実施率%
道	県道小豆島循環線	145	829,759	91	493,293	59.5
	県道土庄神懸線	3	12,113	2	11,213	92.7
	県道坂手港線	4	7,776	1	2,605	33.5
	県道寒霞溪公園線	21	165,826	6	51,656	31.2
	県道嶮岨山線	10	18,980	2	10,121	53.3
	県道福田港神懸線	7	14,626	1	3,990	27.3
	県道橋大角坂手港線	61	500,235	17	106,593	21.3
	県道田ノ浦坂手港線	26	131,687	9	25,305	19.2
	県道三都港平木線	35	236,848	14	114,312	48.3
	県道蒲野内海線	32	332,585	9	43,575	13.1
	県道上庄池田線	15	77,937	7	42,166	54.1
	県道屋形崎小江洲崎線	18	77,565	5	41,934	54.1
	県道本町小瀬土庄港線	21	49,509	7	32,385	65.4
	県道豊島循環線	24	25,943	5	11,445	44.1
県道神の浦吉野線	29	45,715	6	14,511	31.7	
計	451	2,527,104	182	1,005,108	39.8	
河川	伝法川	28	150,437	10	54,771	36.4
	殿川	27	156,616	4	13,950	8.9
	池田大川	6	201,030	5	51,600	25.7
	小川	4	14,953	0	0	0
	鏡川	8	30,647	2	6,703	21.9
	別当川	11	211,066	6	26,437	12.5
	片城川	5	121,998	5	21,279	17.4
	安田大川	4	133,080	2	64,040	48.1
	森庄川	3	9,040	2	4,901	54.2
	吉田川	6	15,694	4	10,610	67.6
	東川	4	13,025	0	0	0
	桂川	6	33,285	0	0	0
	橘川	6	20,100	1	2,497	12.4
	鳴滝川	3	10,399	0	0	0
	木庄川	2	25,702	1	6,294	24.5
	伊豆川	—	—	—	—	—
	中筋川	2	238,931	2	30,257	12.7
	泉踏川	4	12,104	0	0	0
	澄谷川	1	25,458	1	2,000	7.9
	計	129	1,423,565	45	295,339	20.7
海岸防	1	1,970	1	2,228	113.1	
砂防	8	33,387	3	13,058	39.1	
橋梁	3	9,221	2	5,954	64.6	
土捨場費		112,173		37,045	33.0	
総計	592	4,107,420	233	1,358,732	33.1	

(4) 公共土木施設被害(町工事)

(金額単位:千円・実施率:%)

事業種別	町別	金額						
		土庄町	池田町	内海町	総計			
災害復旧事業	河川	全体	箇所	79	50	50	179	
			金額	322,522	449,750	525,698	1,297,970	
		51年度事業	箇所	35	16	32	83	
			金額	82,310	258,181	189,603	530,094	
				実施率	25.5	57.4	36.1	40.8
		道路	全体	箇所	83	126	114	323
	金額			149,118	614,809	288,802	1,052,729	
	51年度事業		箇所	44	23	31	98	
			金額	77,985	183,572	67,322	328,879	
			実施率	52.3	29.8	23.3	31.2	
	橋梁		全体	箇所	—	1	9	10
		金額	—	522	13,401	13,923		
	51年度事業	箇所	—	—	5	5		
		金額	—	—	6,089	6,089		
		実施率	—	—	45.4	43.7		
総計	全体	箇所	162	177	173	512		
		金額	471,640	1,065,081	827,901	2,364,622		
	51年度事業	箇所	79	39	68	186		
		金額	160,295	441,753	263,014	865,062		
			実施率	34.0	41.5	31.8	36.6	
	港湾	全体	箇所	3	2	—	5	
金額			2,459	2,903	—	5,362		
51年度事業		箇所	2	2	—	4		
		金額	1,531	2,892	—	4,423		
		実施率	62.3	99.6	—	82.5		
漁港	全体	箇所	6	8	12	26		
		金額	8,799	16,793	112,516	138,108		
	51年度事業	箇所	6	8	12	26		
		金額	8,581	16,632	107,481	132,694		
		実施率	97.5	99.0	95.5	96.1		
災害関連事業	全体	箇所	—	1	3	4		
		金額	—	14,883	95,320	110,203		
51年度事業	箇所	—	1	3	4			
	金額	—	6,000	29,161	35,161			
		実施率	—	40.3	30.6	31.9		

池田町は予算額

(5) 農地農業用施設被害

(金額単位：千円・実施率 %)

事業種別		事業主体別		香川県	土庄町	池田町	内海町	計
		全	箇所					
災害	農地	全	箇所	—	339	210	178	727
		金額	—	251,770	432,482	881,700	1,565,952	
		51年度補助	箇所	—	134	30	29	193
	金額	—	73,000	110,000	106,332	289,332		
	実施率	—	29.0	25.4	12.1	18.5		
	復旧	農業施設	全	箇所	2	478	361	410
金額			422,330	1,001,480	1,265,383	1,411,071	4,100,264	
51年度補助			箇所	2	135	72	52	261
金額		83,187	270,000	290,000	248,966	892,153		
実施率		19.7	27.0	22.9	17.6	21.7		
事業		総計	全	箇所	2	817	571	588
	金額		422,330	1,253,250	1,697,865	2,292,771	5,666,216	
	51年度補助		箇所	2	269	102	81	454
	金額	83,187	343,000	400,000	355,298	1,181,485		
	実施率	19.7	27.4	23.6	15.5	20.9		
	災害関連事業	全	箇所	—	4	1	5	10
金額			—	14,628	1,198	31,122	46,948	
51年度補助		箇所	—	1	1	—	2	
		金額	—	3,074	1,637	—	4,711	
実施率	—	21.0	100	—	10.0			

香川県小豆事務所土地改良課調べ

(6) 農林被害

(金額単位：千円)

種別		町名		土庄町	池田町	内海町	計	
		冠水	田					
耕地	ha	田	畑	11	50	40	101	
		金額	金額	4	60	300	364	
	埋没流失	ha	田	畑	3.4	5	10	184
			金額	金額	38,000	85,300	150,000	273,300
		田	畑	27	25	44	96	
		金額	金額	152,000	417,700	629,000	1,198,700	
農業用施設	箇所	金額	金額	313	226	227	766	
	金額	金額	金額	653,000	1,186,000	2,069,000	3,908,000	
林業施設	箇所	金額	金額	48	23	38	109	
	金額	金額	金額	129,000	24,600	123,000	276,600	
農林・畜産物	金額	金額	金額	322,023	634,236	367,100	1,323,359	
計				1,294,023	2,347,836	3,338,100	6,979,959	

(7) 商工水産被害

(金額単位：千円)

種別		町名		土庄町	池田町	内海町	計
		水産施設	漁港				
水産	漁港	箇所	金額	—	19	62	81
		金額	金額	—	29,760	200,876	230,636
商工施設	金額	箇所	金額	10	4	7	21
		金額	金額	11,900	100,000	151,900	263,800
商工施設	金額	箇所	金額	—	65	—	65
		金額	金額	—	450,000	—	450,000
計				11,900	579,760	352,776	944,436

(8) その他の被害

(金額単位：千円)

種別		町名		土庄町	池田町	内海町	計
		山(崖)くずれ	地すべり				
山(崖)くずれ	金額	箇所	金額	21	70	200	291
		金額	金額	120,200	84,000	1,000,000	1,204,200
地すべり	金額	箇所	金額	3	—	—	3
		金額	金額	600,000	—	—	600,000
山地崩壊	金額	箇所	金額	—	120	—	120
		金額	金額	—	500,000	—	500,000
計				720,200	584,000	1,000,000	2,304,200



△ 一 口 メ モ

小豆島の過去の災害としては、大正7年（1918年）の8月29日～30日の暴風雨で土庄町北浦湖崎地区で死者8名および負傷者多数をだし、昭和6年（1931年）の9月18日の暴風雨では内海町福田が集中豪雨により、山津波が発生し、死者5名、重軽傷者15名、家屋流失15戸、倒壊および半壊45戸にのぼり、農林被害もきわめて多かった。

昭和36年（1961年）には9月3日から9月4日までの台風17号、9月16日の台風18号（第2室戸台風）そして10月26日から10月27日にかけての集中豪雨と3度の災害に襲われた。そのなかで10月26日から27日の集中豪雨は室生峠が土砂で埋没し、内海町西村地区の各所で山崩れ、地くずれがあり、また安田の三五郎池の欠壊等があり、全壊家屋13戸、半壊家屋36戸、床下浸水1700戸に及んだ。池田町でも、各所で土石流が発生し、室生地区、池田地区で死者4名、行方不明2名、重傷者3名をだし、全半壊家屋30戸に及んだ。

昭和40年（1965年）には台風23号が来襲し、島内の北東部に被害が集中し、小部では死者1名をだし、内海町福田では森庄川が決壊し濁流が中場部落を襲い、30数戸が床上浸水並びに家屋倒壊3戸におよんだ。

昭和49年（1974年）の台風7号に伴う集中豪雨は内海町に7月6日9時～24時にかけて、太陽の丘で358.0mmという局地的な集中豪雨のため内海町の全域で山崩れ、崖崩れ、土石流が発生し、橘地区で崖くずれのため死者19名の他、岩ヶ谷、安田、福田の各地区で総計で死者29名、重軽傷者の21名の人的被害がでて、物的被害も全壊家屋47戸、半壊家屋60戸、床上浸水1054戸、床下浸水903戸ももたらした。また、土庄町でも全壊家屋1戸、床上浸水2戸、床下浸水25戸という近來記録的な被害を受けた。



6. 県下の被害概要

（金額単位：千円）

死 者	50人	小	公共土木施設	16,963,035
重 傷 者	41人		農林水産業施設	18,621,469
軽 傷 者	86人		公立文教施設	58,530
			その他の公共施設	399,765
		計	36,042,799	
住 家	全 壊	274戸	農 産 被 害	3,353,178
	半 壊	317戸	林 産 被 害	190,770
	床 上 浸 水	4,477戸	畜 産 被 害	17,623
	床 下 浸 水	15,224戸	水 産 被 害	638,174
			商 工 被 害	4,861,000
			そ の 他	10,847,818
被 災 者	17,407人	被 害 総 額		55,951,362

△ 一 口 メ モ

過去の県下における台風、大雨による被害総額は50年8月の台風6号による93億を最高に49年の台風8号による66億円、47年の台風20号の52億円、46年台風23号の29億円がある。しかし、今回の被害総額559億円は型破りの額となっており、昭和51年度の香川県当初予算規模1341億円の約3分の1にあたっている。

戦後台風災害による死者数も昭和49年の台風8号の29名が最高であった。

昭和51年17号台風

災害の特徴と対策

土庄土木事務所長 西 田 卓 荘

はじめに

「オリーブの実る平和な島」小豆島は、昭和51年9月の台風17号による集中豪雨で、殆んど全島に亘り崖崩れ、山津波が発生し、家屋は押しつぶされ、田畑は流され、39名の貴重な人命も奪われる等の大被害を受けたのである。

瀬戸の島は、自然の猛威の前に完全に、たたきめざれたと云って過言ではない。

その後、住民は失意のどん底からはい上がり、復旧に努力しており、殆んどが回復されたとは云え、今だに、島の随所に痛々しい傷跡が散見されている。

今回の災害の特徴

今回の豪雨は、これまでの梅雨末期の豪雨とは、その様相を全く異にしてその特徴は

- (1) 「1000年に一度あるかないか」と云う記録破りの豪雨であった。従って、過去に大きな災害を受けた箇所でない、比較的安全と思っていたところに多発したこと。
 - (2) 裏山の山崩れや崖崩れ、鉄砲水による山津波の直撃をうけたこと。
 - (3) 上流より流下した土石が河床を埋め、護岸が決壊したこと。
 - (4) 山崩れによる土砂流入が原因で、ため池が決壊したこと。
- 等があげられる。

特に小豆島における集落は、水の便がよくて、小溪流沿いの平地の箇所に民家が密集しており、

山崩れやかけ崩れによる土石の直撃をうけ、あるいは集落内の道路や谷筋が、鉄砲水による土石の通り道となって、一瞬にして集落をのみこんだのである。内海町の竹生地区一帯や29人の死者を出した池田町谷尻地区は、その典型である。

齊藤香川大学教授の地質学者からの立場での言によれば

- (1) 小豆島は花崗岩が風化中で、極めてもろい地質であり、地表3m～5mほどが真砂土地帯である。真砂土は、水分を吸収して崩れやすく、その下約5mが風化中の岩であり、その下は硬い岩となっている。
 - (2) 小豆島の大半の集落の裏山は、真砂土の安定勾配ぎりぎりの30°～40°の勾配であり、もろい地質と共に、土石流が発生しやすい状況にある。従って、30°以上の斜面と、そのすそ野は極めて危険地帯である。
 - (3) 土石流は、大雨が降り続いて山の保水能力が飽和状態になったうえに、時間雨量70～100mm以上の集中豪雨のあった直後に、必ずおきている。
 - (4) 崩壊は一度起きたところより、むしろ、今まで起きていないところで発生しやすい。極端に云えば、前回、崩れなかった所が今度は一番危険である。
 - (5) 土石流と人工開発との関連性は薄いと思われる。今まで、大災害のあった谷尻地区(51災)、橘地区(49災)の場合も開発していない。小豆島の場合は地質的にどこでも、土石流が発生する時期にきている。
- との意見である。

問題点と今後の対策

1. 住民避難

こんどの災害では、49年7月の豪雨で死傷者が多かった内海町橋地区や、浸水や土石流による激甚な被害をうけた内海町安田・苗羽地区では、1人の犠牲者も出なかったに比べて、池田町谷尻地区等に多くの死者を出した。

なぜ、こんな大事故になったのか？

- (1) 勿論、記録的な降雨量が最大の原因であろう。
- (2) 「これまで災害がなかったから大丈夫」と云う、安心感から多くの住民が避難をしなかった。
- (3) 県及び町の地域防災計画も机上のものでなく、水防演習と合わせて、地区住民総参加の避難訓練を行なうべきであった。

このことについては、今年8月1日、伝法川で小豆島地区水防連合演習が行なわれた。その際に、私は「住民ぐるみの避難訓練も水防演習の中でやるべきである」と主張した。49年に災害をうけた内海町は、積極的であったが、全般に「水防演習としては派手さがない」と云うことで、結局とりやめとなった。私としては、もう少し強硬につばるべきであったと悔まれてきた。

いずれにしても、今後は

「避難は無駄になっても早い方がよい。部落防護団が中心となり、降雨強に注意して、部落住民一体となって避難すべきで、私達住民も自らを守る心構えが大切である。」と反省している。

2. 救援自衛隊

9月11日の朝、内海町長より「安田大川が破堤したので、陸上自衛隊普通科連隊と歩隊の出動を要請した」との連絡があり、私は、直ちに風雨の強い中を内海町に向けて出発した。

内海町に到着、直ちに自衛隊長と応急処理方法や水防資材等の打合せを行った。

そして、派遣部隊の到着を待って、小隊長等と安田大川の破堤箇所に行き、現地での翌日の作業である仮締切工事の打合せを豪雨の中で行なった。そして、一旦資材等の調達のため、栗地ダム事務所に戻った時は、すでに土庄への帰路も数箇所、

絶たれているとの連絡が届いていた。

私は、完全に内海町安田地区で2日間、孤立してしまっただけでなく、

その2日間の仕事は、町長との連絡や、土木事務所職員との災害対策作業の指揮であり、道路応急復旧工事・河川決壊箇所の仮防工事等の救援作業をお願いするため、度々、自衛隊長と打合せに町役場の対策本部に向かった。13日に土庄土木へ帰った後も、池田町役場の本部にいる自衛隊施設部長等とも毎日、救援内容についての意見の交換を行なった。遅れがちな公共土木の復旧作業に、多大の救援をして下さった自衛隊の存在こそ、私にとって心強いものであった。

こうした私の経験を通じて感じた事は

- (1) 被害状況を少しでも早くキャッチして、自治体の責任者は、自衛隊の救援要請を行なうべきである。(内海町長の処置は早く誠に立派であった。)
- (2) 自衛隊の幹部と土木事務所とは、緊密な連絡を保ち作業をすすめるようにすること。(常駐の担当員一名設けること)
- (3) 決壊、土砂崩れ等の道路をなんとか通れるようにする。仮応急工事までは民間建設業界に遠慮することなく、民生安定のため、できるだけ自衛隊の応援をお願いするべきである。(ブルドーザー等、大型機械で能率が上がった)
- (4) 今回のような大災害の場合、自衛隊の応援方法等で、町の希望事項が多く、町の意向を十分に聞いて自衛隊へ伝えるべきである。

3. 急傾斜地崩壊危険区域の指定見直しと、土石流危険区域の設定

香大の鎌田教授は「日頃から地滑り、土石流等の起きやすい所を調査し、危険区域として指定すると共に、住民に対してもここは危険区域だと周知するべきだ」と語っておられる。

土庄土木管内で現在、急傾斜地崩壊危険区域に指定しているのは、わずかに3箇所にすぎない。

しかるに、小豆島の大部分は花崗岩地帯(地表の2~5mは真砂土)で水を吸収して崩れやすい土質であり、今や豪雨型崩壊常習地帯になったよ

うだ。

今後、大災害が繰返す可能性をひめていると考えられる。

この際、急傾斜地の実態を再調査(昭和46年12月に実態調査をしている)して、どしどしと指定すると云う、積極的な行政を確立すべきと思う。

指定にあたっては、土地所有者の抵抗が考えられるが、説得する努力こそ必要ではなからうか。

次に、土石流発生危険渓流の調査が昭和47年にあり、水防計画書には記載されているが、その箇所も少なくあまり役に立っていないようだ。現在、国において「土石流危険区域の表示」の検討がされていると聞く。

一日も早く成案ができて、危険区域が設定され、警戒、避難体制の整備が強く望まれる次第である。

4. 砂防堰堤の安全度

今回のような大災害の場合、技術者としての私達の心配は、「砂防堰堤は大丈夫だろうか」と云う気持ちであったことは、いつわらざる事実であった。

私は自衛隊のヘリコプターで上空を飛んだ時、2箇所の林務砂防堰堤が破堤しているのを見た。土木堰堤は無事で、巖然と立派に砂止め役目を果たしている姿をみて、心強く感じた。

堰堤基礎を岩盤線より以下に入れておく事が、如何に大切であったかが痛感された。聞くところによると、建設省は来年度から高さ15m以上の砂防ダムについては、基礎地盤の検査を実施する事となり、今後はダム基礎地盤の岩級区分をダムの規模に応じて、明確にして検査を行なう事になるようである。

ダムの規模がだんだん大型化の傾向にあり、高さが30mを超えるものもある現在、当然の処置であると思う。

5. 災害による発生土の捨場

台風17号で流出した大量の土石やゴミは、各地の河川・道路・田畑・宅地を埋め、その土量は100万㎡と想定された。

とりえず、海中に流出した一部を除き、大半

の経験から、増田現地災害対策本部長は、将来、絶対必要となる土捨場の確保を痛感され、直ちに港湾側に枕沖を命じたのである。

その条件として、できるだけ国庫補助をうけて、土地の少ない島としては、海に捨てる以外にはなく、公有水面を埋立てて公有地をつくる一石二鳥の案であった。

私は、増田土木次長の先見と英断に敬意を表するものである。

決定された土捨場は

池田町(池田港、平木地内)
面積 37,000㎡
土量 130,000㎡
内海町(内海港 苗羽地内)
面積 56,000㎡
土量 270,000㎡

である。

なお、土捨場をつくる本省(大蔵省・会計検査院・建設省)と県とが申合せした。基本方針を参考のため記すと

- (1) 捨場護岸費は、関係各省庁別、事業主体別で、捨場搬入土量でアロケーションして受けもつ。
- (2) 池田町、内海町の土捨場の護岸費については、代表箇所一括計上し仮決定とする。(災害費+運搬費+護岸費)
- (3) 各事業主体別の護岸費は、当初査定土量で区分し、以後の変更は行なわない。
- (4) 都市災については、仮置処置はやむを得ないが、都市災以外は仮置処置を認めない。但し、やむを得ない場合は別途協議する。となっている。

むすび

以上のほか、被災混乱時の問題点として

(1) 応急仮工事資材の確保

ビニール袋や縄等の資材は、十分に確保されていたが、今後は、矢板も必要である事が痛感された。

(2) 土木事務職員の危険地域への配置

水防本部が設置された時(土木事務所の水防計画書、第2次動員)、直ちに内海町へ14名、49年災害で大被害のあった土庄町福田地区へ3名の職員を派遣したことは、その後、各地が孤立した状況から、適切な処置であったと思う。

(3) 地元建設業者の協力

箭木理事長をはじめ、多くの地元建設業者の方々が、手持ちの機械及び労務者を提供して、不眠不休で復旧作業に協力していただいたのである。これほど、私にとって力強いものはなかった。

今改めて、紙上をかりて御礼申し上げる次第である。

(4) 新聞記者等の報道関係への態度

直ちに担当員をおき、所内の意見の統一をはかり、被災情報、及び復旧計画等の発表をすべくであった。

次に被災後の問題点としては

(1) 急がれる道路復旧

被災直後、職員の献身的な活躍と建設業者や自衛隊の協力によって、主要幹線道路は、普通車一台が通れる程度の巾員を確保したが、被災後一カ月位になると、人心が平静にもどり、バスが通れる道路への復旧への要望が強くなった。なんとか主要バス路線は開通したがいまだに、バスの通れない箇所も残っており、これが対策に頭のいたい昨今である。

(2) 各省間にまたがる災害採択事業の調整

緊急砂防事業については農林省と建設省との調整が、必ずしも円滑に処理できなかった。

その理由は、地元町を交じえての各課の調整する時期が遅れ、農林関係が調整前に現地の調査及び測量に入ってしまったことにある。

今後は被災直後、直ちに現地で調整すべきである。

(3) 非常災害時における土地の一時使用

道路が決壊した場合、緊急に迂回路を必要とするわけで、民地を一時使用することになる。今回の災害にあたって、このようなケースが随所にみられた。

こうした場合、当然のことながら事後になっても、土地所有者の了解をとる事が必要であることは、勿論だが、多忙なため、つい後廻しになりがちである。

そんな事から、現在1件トラブルが発生してその処置に困っている。

道路法第68条、69条、土地収用法第122条、水防法第21条等で明快に「他人の土地を一時使用してよい」と記されているが、事後処理は、所有者の立場を十分理解して、早急、且つ円滑に所有者と話し合い、お互い感情的にならぬように努めたいと願うものである。

(4) その他

都市災害復旧事業の査定や実施が、都市計画課担当員の町への指導が、迅速に完全であったのでうまくいったこと。

又、災害直後2カ月間は技術職員の中では、1カ月140時間もの超過勤務をせざるを得ない状況であり、三六協定等で問題が発生したこと。

そして、今回の災害復旧の測量及設計等の作成にあたり、多くのコンサルタントの応援、協力を得て助かり、本当に有り難かったが、コンサルタントの技術には、まだまだの感が深く、今後の研さんを要望したいこと等、もう少し詳述したいが、別稿にゆずりたい。

最後に災害復旧に際し、関係各位の絶大なる御支援と御協力に対し、心から御礼申し上げると共に、職員が今日迄、怪我もなく、病人も出ないで頑張ってくれていることに対し感謝し、12月の第3次査定が完了するまで、事故のないことを祈るのみである。

(S.51.12.1.記)

まるでお天とうさんが悪いのだ

(台風17号の被災地の姿)

土庄土木事務所維持課長 村上光由

降り出した雨が止まなかったことはないと言われ、雨足の上がるのを待つこと5日間、悪夢のような昨年9月の17号台風が来襲してより100日余りが過ぎ、新しい年昭和52年を迎えました。しかし、現在でも私達の目の中に入ってくる風景は姿を消してしまった住居、一面のガレキの田畑、灰色の電照菊、無残にモギ取られた山肌等であり当時のすさまじさが各所に残っております。台風が島に与えた被害の甚大さはすでに各方面より報道され、その復旧についても関係者一同一丸となって頑張っておることはすでに周知のとおりでありますので、今回は本紙をお借りして、被災時より今日までの報道されなかった事柄、又私個人が肌で感じたことを述べさせていただきます。

(1) 被災直後の住民の姿

人間の生きるよろこびと根性、ならびに物事の変化に対応する順応性はすべての者が持ち合せておるように思われた。流された自分の家や田畑の前でたずんでおる人々の顔には隣の生き埋めになった犠牲者をどのようにしてでも掘り出そうとする根性、又自分は生きておるんだという安堵感、何は無くとも生ほど尊いものはないという人間の一面が見れた。被災後10数日間、所によっては20日以上の間崩壊寸前の自分の家の床上まで埋った土砂を毎日毎日取り出す作業の姿であった。下は10才位の子供から上は80才を越す老人まで家族全員がにぎりめしを食べながら元気に働いていた常にスコップや1輪車を持ったことのない人が殆んどであったが、自分が住むためにはこのようにするしか方法がないと云う宿命を背おったためではあるが、人間には順応性があるということを目

で感じたが、ほんとうに哀れな姿であった。

流されて無くなった自分の住居跡のたそがれせまる谷あいで救助物資の衣類等を分配する姿は関係者の涙をさそった。人類の歴史は災害の歴史であると云われておりますが、人間気持の持ち用でどのようにもなり、私達の遠い親達はその時、その時に順応し自分の住む地域を復旧し人類が進歩をとげたものと思います。

昔のコトワザに、「国乱れて孝臣出ず。家乱れて孝子出ず」といわれておりますが、各所で孝子を発見しました。私達復興にたずさわる者は皆行政官としては立派な孝臣であり、島の住民としては孝子であったと信じております。人間非常時には悪人も、悪党も一人も居らないと感じました。このように島をあげての精神力によって、小豆島は必ず元通り以上に復興が出来ることを信じております。

(2) 災害が残したものと被災地の姿

耕やすにもどうすることも出来ない田畑、崩れ落ちた電照菊のハウス等、すべて住民の生活の糧となるべき資産が流失され、どのように復旧すべきか。その方法について途方にくれておる姿は、被災を受けた者のみが味わっておる現実であります。明日からの生活をどうするか、将来はどのようになるのか、五里霧中というのかほんとうの姿のようである、各関係方面からの強力な指導と援助が必要であります。

道路や河川の復旧は地域住民の生活上、ならびに社会上、絶対的に優先して実施する必要性は当然のことですが、一時的な仮復旧が終了した時点で、全島内の復旧状況を見渡しますと、住民の生活面

での復旧が遅れておるように思われます。

被災直後は余りのひどさに、私達現地を見た者が感じたことは、今迄ここで住んでいた人達は、もうこの土地を捨て、他に移り住むのではなからうかと思われました。しかし、その後3カ月余りを経過した現在の姿は、殆んどの人が、やはり元のとりの所で復旧して住むようであります。

今回のような降雨は100年に1度か300年に1度かといわれておりますが、その際せめて人命に被害の無いような復旧工法を取ってもらいたいと思うが、現実には種々の制約があり無理のようである。これが人類のほんとうの生への姿であるのかも知れない。現在自分の家が流失し、プレハブの仮住居に仮すまいしておられ人々の心は肌をさす寒風以上に、心にも被災者のみか味う種々の宿命を移められておることと思われまふ。暖かい支援がなよりの心の復旧だと感じております。

(3) 地区名と被災地との関連性について

今回の災害は小豆島狭しといえども、各所に局部的な大被害をもたらした、その中で激じん地区の地名がほとんど、災害に関連性があるのか、それとも長い歴史のうちに自然に付けられたものか、どうか、はっきりしないが、無残なツメ跡には転石がころがり、人工的に手を加えた形跡のある田畑が多かった。

その地名は、谷尻地区(池田町)水木地区(内海町)竹生地区(池田町、内海町)石場地区(池田町)流地区(内海町)瀬山地区(土庄町)流サレ山(土庄町大部)等とすべて水の流れと石の難所から付けられたものであり、竹生とは、昔から地盤が悪い箇所には、竹を植えて防災に備えたものでそれからこの地名が付けられたと思われる。地区名と災害を結び付けるのはそこに住む人々に対して失礼と思いますが、これは私のみが感じたものか、どうか、余りにも不思議な因縁であることには間違いないようであります。

(4) 土質研究者の姿

被災後、各著名な先生方、各大学や官庁の研究機関、地質学者、防災関係者等が波状的に来島

され熱心な調査をして、高度な知識によって各方面よりの貴重なご意見を拝聴しました。各々の立場での意見はそれぞれ異なり180度変わった事柄についてのご指摘もありましたが、皆さんが口をそろえて意見の最後には、やはり時間雨量100ミリを越す雨が悪いのだ。と言ったのが、非常に印象的であり、現在の科学の力、人間の頭脳の範囲ではどうにもならなかった今回の災害のすさまじさを感じました。

調査に来られた皆さんは貴重な資料を目前にして、非常に生き生きとして山野を駆けめぐり、現代の科学の粋を集中しての調査の結果は、必ず立派なものが出来あがり、島の防災対策に貴重な資料を提供してくれるものと確信しております。

(5) 雑感

人間の歴史は筋書きのないドラマだといわれておりますが、まさにこれを地でいった今回の被災が、島民の生きる根性と、明日への生命の希望を求めて立ち上っていることを、肌で感じました。私達復旧事業にたずさわる者は、有形のもののみを元に戻すのではなく、島民が受けた心の痛手の復旧も同時になおすよう心がける必要があることを痛感しております。

被災地のその後の姿の一部を書きましたがこのような原因を考える時、さきにも述べましたが、だれの責任でもなく「まるでお天とさんが悪いのだ」に尽きると思います。(52年1月10日)

台風17号災害に遭遇して

土庄土木事務所 大 浜 俊 次

秋風が立ち初めた頃襲来した台風17号は、小豆島に未曾有の災害をもたらして悪夢の如く去った。島中判るところ悪鬼のひっかき傷で満身創痍といった感があって、もはや直立れないのではと、思わず土木屋にあるまじきことを考えたものだ。当然のことながら、自然の力に比べて、何と人の力の微々たることか。崩壊の地の跡には、いつもの年と少しも変わらなくかれんな萩の花がすつくりと咲き、アキアカネののんびり飛び交った。ただひとり右往左往し、嘆き悲しんだ人は、人々のみである。

49年の7月に、一度警鐘は鳴ったのだが、100年に1回のことだと、私も含めて多くの人々は、よくもあっさり貴重な鐘の音を忘れたものだ。さわやかな秋風をふと感ずる刻の余裕もないままに、今や木枯しじみた風の中に身をやつしている。忙しい日々繰り返しの中に驚いたことに、はやあの胸底に刻みこめたはずの貴重な体験が、色褪せ記憶の彼方に埋没し始めているようだ。あの時私は個人的に何ともやり場のない怒りを感じたものである。小さなかわいい女の子が、黙々と濡れて泥まみれになった教科書をかたづけていたのを私は確かに静かな怒りを持って見ていたはずではなかったか。以前その下に明かるい笑い声の響く生活があったはずの家屋の残骸の中に、プラモデルの小さな車輪が二度と組み立てられることもなく、放って置かれるのを眺めた時にも、私は絶対に心底怒っていたはずだ。怒りが、新聞の天気図を切り抜かせ、災害に関連する記事を切り抜かせ、TVの災害特集番組を観させたはずである。しかし、わずか2カ月余りで、私の怒りのネジは緩ん

でしまったようだ。私の無力さを私の無念さを棚の上に放り投げてしまったようだ。私自身のためにも、もう一度時を遡行してあの土砂降りの雨の中に身を置く必要があると思われる。

昭和51年9月8日(木)午後8時30分に台風第17号に感ずる情報の第一報が入った。最大風速60mの超大型台風である。9月10日早朝には南九州に上陸して遅くとも11日までには四国地方はその影響から免れるような情勢であった。高知県地方では、異計雨量が200mmを超えた所もあったが、香川県では、8日現在、せいぜい40mm前後であった。私達も、この頃はのんびりとしたもので、いつもと同じような台風になるだろう位にしか思っていなかった。夜は待機班を尻目に、球技大会に備えて、バレーボールやバドミントンの練習をしていたものだ。しかし、依かに騒然としてきたのは、9月10日の白々と夜が明ける頃からである。午前4時30分に、大雨洪水注意報は警報に切りかわり、私は夢の中から、ドアのチャイムで激しい雨の中に引きずり出されてしまった。この時、たたきつけるように降っていた雨もその後断続的に強くなりながらも小康状態を保っているように思われた。私は軽い気持で殿川グムの待機に向った。(警報発令時にはグム係から山口技師および秋友技師の2名と土木事務所から1名、計3名の職員と、嘱託の管理員2名および上水道企業団から1名の合計6名で待機班が構成されるものである。)さて10日の夜は、のんびりと夕食を食べ風呂にもゆっくりつかることができたのも東の間、午前0時を過ぎた頃から、再び雨が強く降り出し、以後2時間にわたって天の底が抜け落ちたかとも思われるほど

激しい雨が降り続き、最大時間雨量は、四方指で46mmを記録したが、特に2時から10分間の雨は、言語を絶するものでわずか10分間で21mm降った。ダムの貯水位も目に見えて上昇し始め、15分間で40~50cmという超スピードであった。洪水面積の小さいことと、急峻な地形であることを考慮に入れても、驚くべき上昇速度である。降った雨は間髪を入れずそのすべてが直通してくるといった様相である。この強雨からいつもの雨とは少し異なるという思いがしていく。

テレメーター観測も10分間タイマーに切換え、めまぐるしく送られてくるデータとまるで死物狂いで戦っているような状態で強雨が去ると皆ほっとして、グッタリになってしまった。夜が白み始めると共に雨脚も強くなり、入ってくる気象情報も気の滅入るものばかりとなってきた。“台風は依然として強い勢力を保ったまま九州南海上に停滞し……香川県東部から小豆島にかけて強い雨量のエコーが見られ、更に嚴重な警戒が必要ですよ” 悪い予感ほどの中率は高い、気象情報どうり、曇過ぎから更に雨は激しくなり、四方指では、12時から13時まで53mm、13時から14時まで72mmという記録的な豪雨となってきた。この時の雨でダム左岸下流の小屋が、目の前で鉄砲水によってあっという間に流され、それは建物全体が一枚の薄い屏風になったかのような錯覚を起こさせるほど、あつけないものであった。と思うまもなく、道路が侵食され始め、ものの5分も経たないうちに、延長20mにわたって道路は跡片もなく削り取られてしまっていた。白昼に災害の記録映画を早まわして観たような妙な気分であった。道路の状況に目を奪われていると、今度は、ダム上流の左岸道路の切取法面が、大音響と共に押し流され、いよいよダムの6人は孤立してしまったかと、暗澹たる気持ちに陥ってしまった。冗談でなく、心底、オレは自分の家族もちゃんと守れない因果な商売を選んだものだと思ったものだ。肝を冷やした雨も幾分おさまってきたが、雨は依然激しく、時間雨量20mm前後で降り続いてきた。陽が落ちて（と言ってもながいあいだ太陽のあの輝く顔は拝見して

なかったが）辺りに暗闇がたちこめると、ますます孤立感は高まり、おまけに、午後7時少し前、停電になってこの世の中からまさに光が駆逐されてしまったかと思われた。幸いにして、まさに幸いにして予備発電機は正常に働いて、どうやら漆黒の地獄からは遠いずり出られたが、いつ果てるとも知れぬ水責め地獄には、いさか自暴自棄な気持ちになりそうでさえあった。そのうちに島の各所の被害の様子がいくらか誇張されて伝えられてきた。“灘山、吉田、当浜、岩ヶ谷地区では陸路を完全に絶たれ、海上からの避難が始った” “大部地区で土石流が発生し、かなりな人数が死亡しないしは行方不明となっている” “長浜地区では大規模な地すべりが発生し詳細は不明”等々。ただでさえ疑心暗鬼に苛まれている所にこうした確かめようもない情報が入ってくると、理性的であらねばならぬ時に感情に押し流され、ひいてはダム操作に誤りを生じないとも限らない。ダムの下流には、何千人という人々の生活や財産があることを性根に入れておく必要があることを痛切に感じた。しかし、その心意気もいつまで経っても止むあてのない雨をみているとともすれば、挫けそうになったものだ。11日の夜8時過ぎから再度強雨に襲われ、時間雨量突に殿川ダムで95mmに達した。暗闇の中で雷鳴に混って何処かで山の崩壊する音が轟いていた。地の底から人の心を揺さぶるように。

雨は、11日の深夜と12日曜日明けの夕方再度激しく降って、どうかこうにか峠を越した。暗れ間が見えたのは13日の昼すぎである。何と空が底ぬけに明るく見えたことか！ 大きな解放感と共につくづく感じたのは多目的ダムの持つ宿命的な矛盾である。利水と洪水調節という全く相反する機能をひとつのダムに持たせることは、特に今回のような計画以上の降水量の場合、貯水量の小さい、且つ洪水到達時間の極めて短いダムでは、現場でダム操作に当る人に重大な責任が負わされるということ身をしみて感じた。また台風襲来時期に入ったら、ダム操作システムのすべてにわたって点検チェックをしなければならぬと思った。台風が発生をみたら、少なくとも中枢機能だけは、そ

の都度チェックを試みるべきだろう。小さな蟻の穴ほどの詰めの甘さが、有事の際には思いがけない命取りになり得ることを改めて知った。例えば、卓上計算機の電池がひとつ不足しても、おおいにダム操作に支障をきたすところであった。かくして、最大級の犠牲が払われたにもかかわらず、貴重な体験は、日毎色褪せ危機感も急速に去ってしまいつつあるようだ。当座は、私は何にも変え難い経験をして、多くのことを学んだと肝に命じたはずであるが、今こうして2ヶ月後にその時のことを振りかえってみるに、驚くほど何も自分の中に残っていないことを知り愕然とするのである。災害直後から、ただひたすらに巴れの前に与えられた仕事をのみ黙々と消化することに追われて、ゆっくり当時を振りかえり、疑問に思ったことを掘り起こしてみる余裕がなかったせいだろうか。この甚大なる被害の真只中に在って、私は私の歩いた道しかその被害を知っていないのである。これは、大きな損失であると思う。少くとも、土木屋である限りは、細々ながらも自然に戦いを挑んでいくわけであるから、この何百年に一度あるか

ないかの体験を無に帰してしまうのは、実に惜しい。そこで思うのであるが、今度の災害の全貌をまとめて各人に新ためて銘記させることが必要なのではなからうか。例えば、雨量記録から始まり、道路河川被害等の状況はもちろん、被災写真および航空写真を掲載し、出来れば、大規模な山くずれの解析と今後同様の災害が起こると予想される地域を具体的に提えたもの、あるいは復旧工法で特殊な工法を採用した場合、その概説等といったところを一冊の本として残したらいかだらうか。49年7月の災害については、土石流関係にしばらく記録および解析がなされたようであるが、残念ながら、それは土庄土木事務所に置かれているかも知れないものである。今さらながら非常に残念なことだと思ふ。三度同じ轍を踏むことだけは避けたいものである。各人に、もう少し自分のいる土地のことが分かっていけば、ひょっとしたら39分の1の命だけでも助かったかも知れないと思うと無念なのです。人が無為に死ぬなんてことは、もうこれっきりにしようではありませんか。

(51.12.1記)

17号台風を顧みて

内海町長 川北 四十二

「災害は忘れた頃にやってくる」といわれておりますが、最近全国各地において災害が頻発しております。特に内海町には災害が忘れない頃にやってきました。

昭和49年7月、町はじまって以来といわれ、29名もの尊い生命を奪った台風8号災害の爪跡がいまだいえない時、再び犠牲者こそ6名で少なかったとはいえ、その被害額は前回を遙かに上回る大

災害に、町民一同天を仰いでなぜ内海町ばかりがこんな悲惨な目にあわなければならないのかと、その無情をなげくばかりであります。

私達はこのにがい経験を生かして二度と再び悲しみの歴史を繰り返さないことが、み益を勉める唯一のみちであると犠牲者の霊前にかたく誓って災害復旧の早期完成と防災対策を町政の最重要施策にかかげ、国・県に強く要請して著しく立ちお

くれている治山治水事業を強力に推進してきたのであります。

国、県においては災害直後現地調査団を派遣し被害状況を調査し直ちに危険箇所緊急砂防ダム及び谷止工の建設、急傾斜地崩壊防止事業、河川、道路、港湾の改修等適切な応急対策により二次災害の防止につとめ、更には「激甚災害対策特別緊急整備事業」を創設し、本町をその地域に指定して砂防ダム及び谷止工を建設することにより、恒久的な防災対策を講じたのであります。

一方町においては、町管理にかかる河川、道路、漁港、橋梁をはじめ文教施設、農地、農業用施設等の復旧事業を国の計画より以上早期に施行すると共に、防災計画の再検討を行い不時の災害に対処し得るよう万全の対策を講じ、町民に対しては、町民一人一人が平常から防災に関する関心を深め、自分の生命と財産は自分で守るという自覚のもとに不時の災害に適切に対処し得るよう常に心の準備を固めておくよう指導してきたのであります。

ところが水不足に悩まされている本町が数日間、年間雨量を上回る、1400mmの豪雨によって、一昨年に引きつづき大災害を受けようとは誰れもが予想しておらなかったことであります。

本町は過去においてしばしば洪水に見舞われ、昭和48年から3年間連続して夏期に断水し極端な時間給水で急場をしのいできたのであります。

今年もお盆すぎからダムの水量が底をつき9月上旬から時間給水はさげられない情勢であったが、9月7日の恵みの雨でその心配も無くなり、引きつづき8日も順調に雨が降り、これで今年はずいぶん大丈夫とホッと一息ついたのも束の間、9月4日に発生した台風17号は次第に発達し時速30kmで北西に進み8日最もその勢力を逞し、大型の非常に強い台風となりその後北西に進んだが次第に速力がおそくなり、鹿児島島の南西約200kmの海上で停滞していつまでも動こうとしなかった。

その影響で香川県東部を中心に強い雨が降りつづき9月8日、18時20分大雨注意報が発令された。

早速台風8号の被災地である橋、岩ヶ谷、福田の各地を巡視して関係者に台風の接近に備えて警

戒を厳重にすると共に危険を感じた時には状況を判断して住民を安全な場所に避難させよう指示をあたえた。

8日、9日雨量も比較的少なく災害の発生に至らなかったが、9月10日、4時30分、大雨洪水報が発令された。

雨脚は次第に強くなってきた。これは只事ではないと直感した。大災害を経験した者のみの直感である。

5時30分、内海町水防本部を設置、直に消防団員を非常召集、管内の河川及び危険箇所の巡視、警戒にあたらせると共に万一危険な状態が発生すれば分団長の判断で住民を所定の避難場所に避難誘導するよう指示をあたえた。

49年の惨事を再び繰り返してはならない、なんとしても尊い人命は守らなくてはならないとかたく心に誓った。

「安田大川警戒水位まで後10cm」

「土砂崩れのため町道田ノ浦線不通となる」

「中筋川決壊」

「松尾池決壊のおそれあり」

「別当川、安田大川、片城川警戒水位突破」

電話のベルがひっきりなしに鳴る、次々と被害報告が入ってくる。雨は愈激しくなる。遂に意を決して全町に避難命令を発令した。

時に11日2時30分であった。

「福田地区住民公民館に避難」

「福田下川良吉氏一家3人家屋もろとも土石流で流され下川良吉氏は死亡したとの悲報に接す。最初の犠牲者である。

「今坂池、吉郷池、小見山池決壊のおそれあり」

「諸口川決壊す」

次から次へと河川、堤防、道路の決壊、家屋の流失、倒壊の報告あり。

11日4時50分、水防本部を災害対策本部に切替える。このように被害が続出する状態では到底地元だけでは対処することができないと判断して、8時に自衛隊に出動を要請した。

この頃対策本部も床上浸水50cmとなりかつて30数年前、雨季のヒルマ戦線での死闘のことを思い

おこしながら水浸しになって指揮をとりつづけた。11時5分内海町に災害救助法が適用された。

雨は一段とはげしくなってきた。15時頃、流川上流の山崩れのため河川が氾濫し、数名の行方不明者が出た模様、何んとか生きていてくれるように心に念す。

この頃竹生地区でも山崩れのため家屋の倒壊により行方不明者が続出した。

前回被災した橋、福田地区異状なしの報に胸をなでおろす。

安田消防分団屯所危険のため安田小学校に移転。

9月11日東部海岸の県道決壊のため橋地区以北は孤立、岩ヶ谷住民収容のため海上保安部の巡視艇に出動要請。

9月12日1時30分、待ちに待った自衛隊100名到着、地獄に仏の思いである。沈みかかった住民の意気が急にあがってきた。

自衛隊は直ちに安田大川決壊箇所の応急復旧作業に着手、避難者の救助、行方不明者の捜索、道路の応急復旧等に力強い救援活動に全町民は活力を取りもどすことが出来た。本当に有難いと涙が出るほどうれしかった。

鹿児島沖に居すわった台風がやっと動きはじめ13日1時40分、長崎市附近に上陸、九州北西部を縦断して五時頃玄海灘にぬけ、日本海を北東に去っていった。

とどまることを知らなかった雨もやっと小降りになり、9月13日12時40分、大雨洪水警報は解除された。

自衛隊、警察機動隊、消防団は行方不明者の捜索をつづけ、次々と遺体を取容、9月18日最後の遺体が取容された。

消防団員の懸命の避難誘導のいかにもなく、6名の尊い生命がうばわれてしまった。

まことに痛恨の極みである。

台風は通り魔のように大きな爪跡をのこして去っていった。前日途荒れ狂っていた空もウソのように晴れわたり、周囲の山々は無惨にひっかかれた赤肌をあらわし、災害のひどさを物語る。

9月8日の11時から13日の15時までの降雨量が

1,335mmに達し、1年間の雨量に匹敵する記録的な豪雨により死者6名、重軽傷者42名家屋の全壊113戸、半壊143戸、床上浸水1,585戸、床下浸水1,203戸で町民の65%が被害をうけた。また道路、河川、学校等の公共施設及び農地をはじめ山林、漁港等農林水産施設の被害額も甚大であり、商工業の中心部は長時間にわたっての床上浸水で中小企業者の原料、商品、製品機械等の被害は莫大なものとなった。しかもこの大災害は昭和49年7月本町を襲い香川県災害史上はじめてといわれた台風8号による集中豪雨災害をはるかに上回るものであり、49年災害復旧事業が本年度で完了するという矢先、わずか2年にして町内全域にわたる壊滅的な打撃を受けたのであります。

若し粟地多目的ダムが完成しておれば少くとも町の中心部の被害は防ぐことが出来たと思われま。地元住民もダムの必要性を痛感していると思われま。今後は地元住民のご協力を得て一日も早くこれを完成して、防災対策と水資源の確保の両面に活用しなければならぬと、大いに意欲をもやしている次第であります。

今や災害発生後1か月、災害の査定も順調にすすみ目下災害復旧のため全力をあげて取り組んでおります。

特に今回のような激甚災害をつづけて2度も体験した私が直接肌で感じとったことは、

- 一、自然の猛威の前には人力がいかに無力であるかということ、その反面人の力で自然に対処することも決して不可能ではないということ。
- 二、砂防ダム、谷止工、急傾斜地崩壊防止事業、河川の改修等総合的な治山、治水対策が災害を未然に防止し、被害を最少限にいとめるため、如何に重要であり、かつ又その効果が大であるということ。
- 三、避難場所の選定と避難命令の徹底。
- 四、迂回路の必要性。
- 五、通信網の整備。

等々であります。今回の災害において49年災害の教訓は立派に生かされた。即ち前回いためつけられた橋、岩ヶ谷、福田地区は緊急砂防ダム及び

岩止工が建設されていたため殆んど無傷に近い状態であり、避難が早かったため犠牲者も比較的少なかった。

私は二度にわたる災害から学びとった尊い教訓をよくかみしめて、三たび同じような悲惨な事態を繰り返さないよう更に一層防備、防災対策を強化して極力被害の軽減をはかり、尊い人命の安全と国土の保全のため最善をつくし住民の期待に応えなければならないものと決意を新にしております。これを達成するために、防災対策のうち最も効果的大である砂防ダムの思い切って大きなものを数多くできれば「万里の長城」のようなデッカイものをつくって頂くよう強く国、県に要望いたします。

町は災害直後国に対して次の事項を強く要望しております。

要 望 事 項

1. 財政措置について

- 1、今次災害に「激甚災害に対処するための特別の財政援助等に関する法律」を早急に適用されたい。
- 2、災害応急対策、災害復旧等に要する地元負担が多額におよぶので、特別交付税及び地方債を増額する等、その財源措置について格別の配慮を願いたい。

2. 土木関係について

- 1、災害復旧工事の残土処理に要する費用を、全て公共土木施設圃庫負担法の対象とせられたい。(公有水面埋立の護岸費等)
- 2、災害復旧関連工事の採択に、特例を認められたい。
(河川の上流部分に土石流が発生、その土砂のため下流部分は埋没したが、護岸は被災しておらず、災害額が少額のため関連工事とならないもの)
- 3、激甚な被災地区の全・半壊家屋等の取除きを都市災害堆積土砂排除事業の補助対象とせられたい。
- 4、災害査定設計の作成に要する測量等設計委託費を、災害復旧工事費に含められたい。

- 5、今回の災害により、既設の砂防ダムは全て堆砂満杯し、下流域は土石流に対し無防備の状態となったので、直ちに浚渫を施行せられたい。
- 6、激特砂防事業を継続施行せられたい。
- 7、災害復旧助成事業に、安田大川、片城川を採択されたい。
- 8、急傾斜地崩壊防止工事の採択規準を緩和するとともに、国の補助率を引上げられたい。特に当町のごとき再度の激甚災害を受けた地域については、特別の措置をお願いしたい。

● 一 口 メ モ

△被災地への救援活動は陸海自衛隊、警察、海上保安部、消防機関を中心に続けられたが、陸上自衛隊は災害発生以来、普通寺・広島・山口・米子・出雲の各駐とん地から1600名、延べ9220名(車輛延べ1670台)、海上自衛隊も呉総監部から特務船、駆潜艇、掃海艇など16隻が出動し、行方不明者の捜索、道路の復旧作業、物資輸送、給水活動にあたり、9月23日までにほぼ全員が引揚げられた。また、消防団も台風の被害が予想されて以来河川の警戒、人命救助、土俵積等の作業に活躍され、2日の762名を最高に23日まで延べ4632名にものぼった。

△集中豪雨により大量の土砂がいたるところで流出したが、この数量は約80万立方メートルにも及び、8階建県庁本館の約26倍という驚くべき数字となっている。この廃土処理は内海町は内海港馬木地区、橋漁港に6万5千平方メートルの埋立てを実施し、池田町は池田港、谷尻漁港に4万9千平方メートル、土庄町は四海漁港に1万2千平方メートルの埋立工事を施行することになっている。

△台風17号により島内の随所で河川の決壊、道路の損壊が発生し、その応急措置の土俵積に用いられたのがカマスだが、カマスの使用量は土庄町33308枚、池田町64,236枚、内海町13,975枚で総計166,519枚という膨大な量が消費された。

△河川、ため池の決壊、崖くずれ、山くずれの被害が全地域で発生し、未曾有の人的被害を被ったが、そのなかで、住民への避難の勧告指示、命令も各地でだされた。被害が続出していた12日には土庄町3549名、池田町2031名、内海町2031名の住民が学校、公民館等の公共建物、親戚知人宅へ避難しており、島の人口4万5千人の約4分の1が避難したことになる。

△今災害により、209世帯672名の人々が、住む家を失ったが、その応急仮設住宅は9月26日の池田町石場地区を最初に、全壊家屋の多かった地区で建設せられ、内海町65戸204名、池田町39戸131名、土庄町5戸15名の合計109戸350名が入居された。

応急仮設住宅はプレハブづくりで1戸あたりの基準面積は23.1平方メートル間取りは6畳、4畳半の2DKが標準となっている。

△台風により島内の道路はずたずたに寸断され、交通はマヒしたため、孤立地区が多数発生したが、その孤立地区を結ぶ住民の足及び救援物資の輸送の海上バスとして活躍したのが、本四連絡橋公団所属の調査船「さぬき」「びさん」と水産試験場所属「やくり」で14日から27日までの交通状態が良好にもどる期間の間各地を結んで運行された。



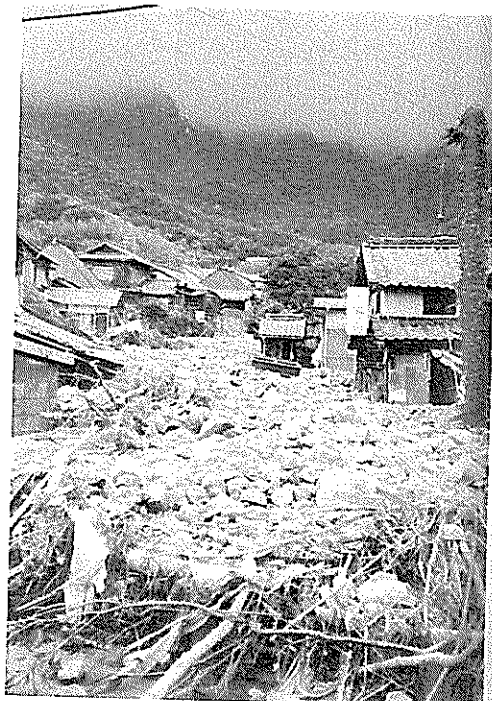
安田大川



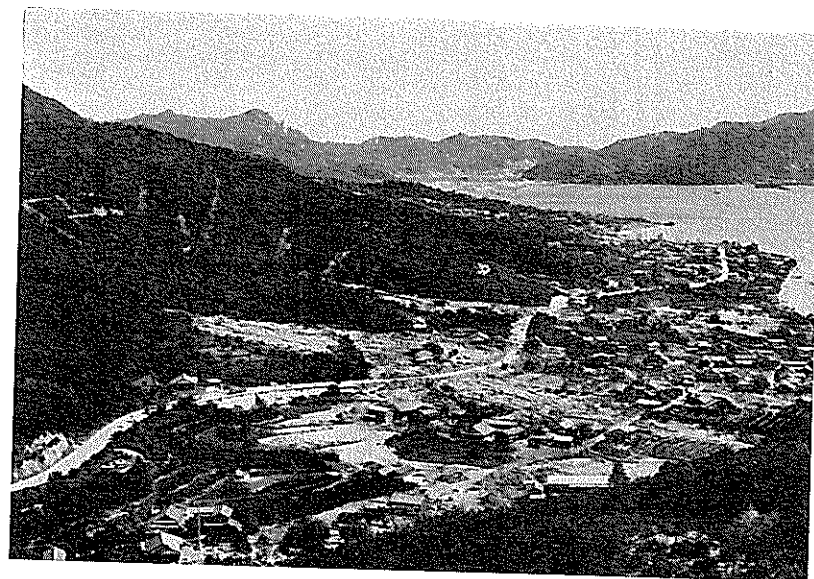
中筋川



中筋川



当浜川



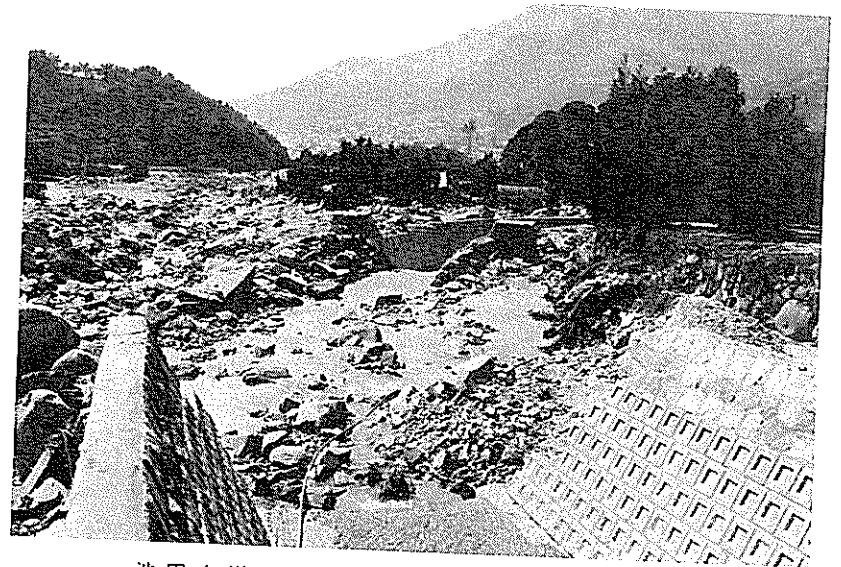
内海町竹生地区（竹生川）



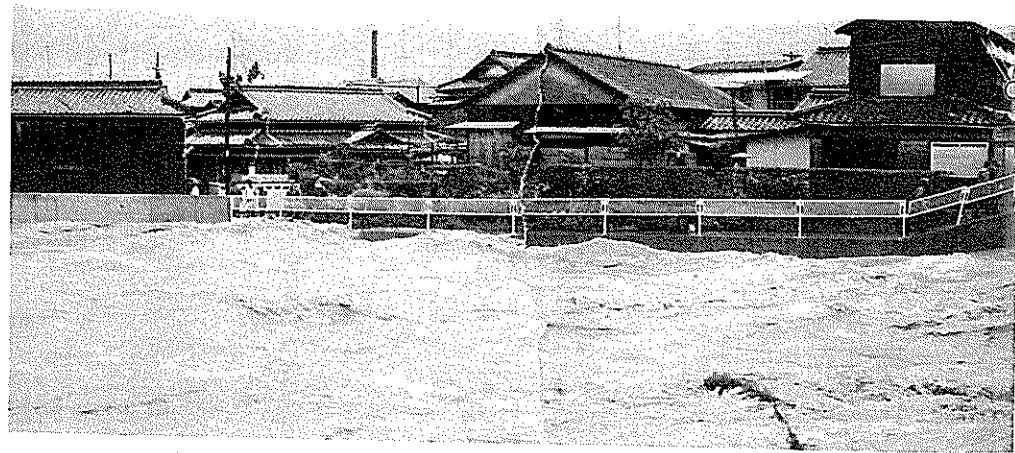
竹生川支流赤坂川



池田町石場地区（石場南川）



池田大川



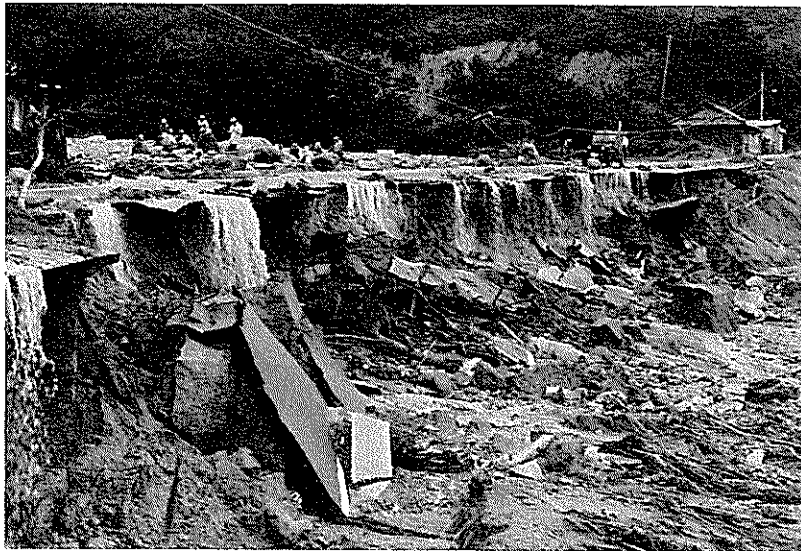
伝法川（土庄町八幡橋附近）



内海町役場附近

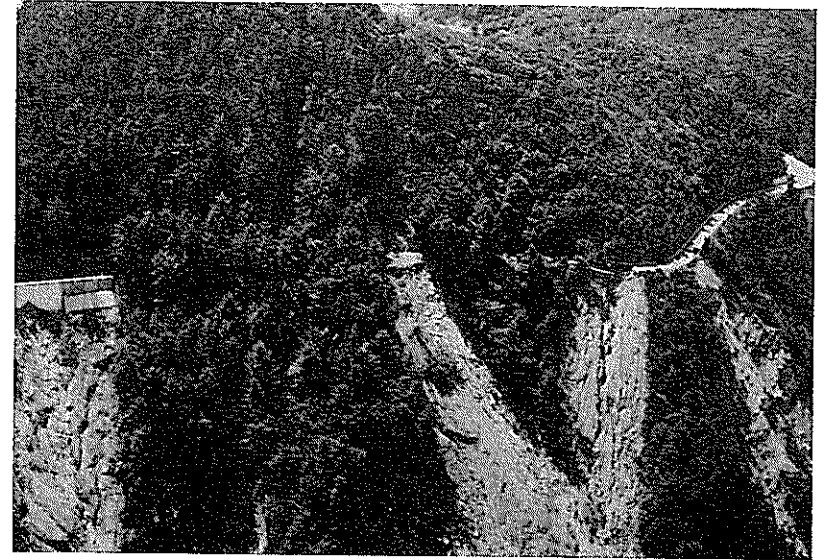


内海町役場附近



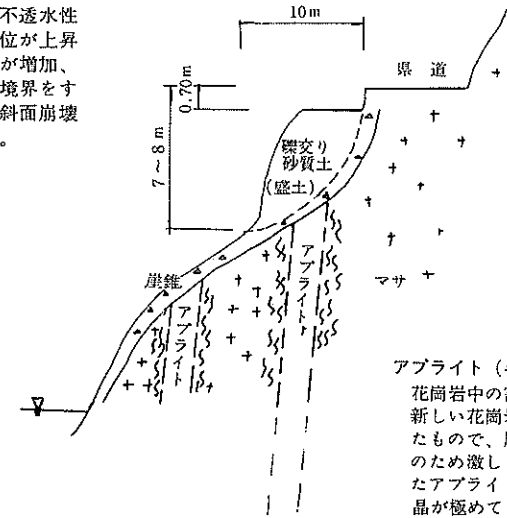
県道小豆島循環線（池田町丸山峠）

県道小豆島循環線 内海町藤崎



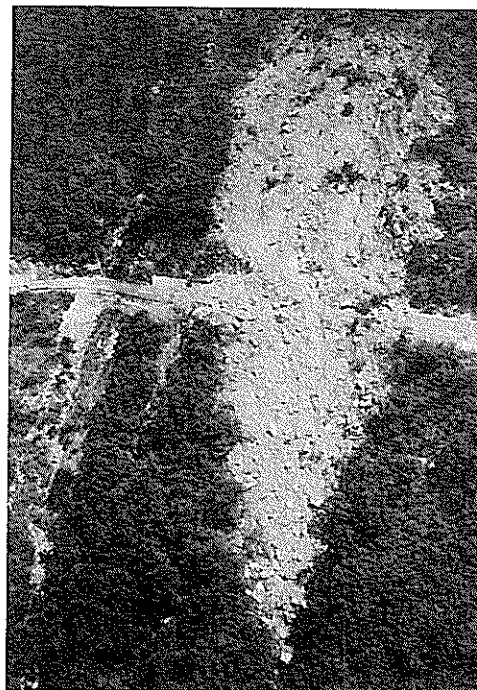
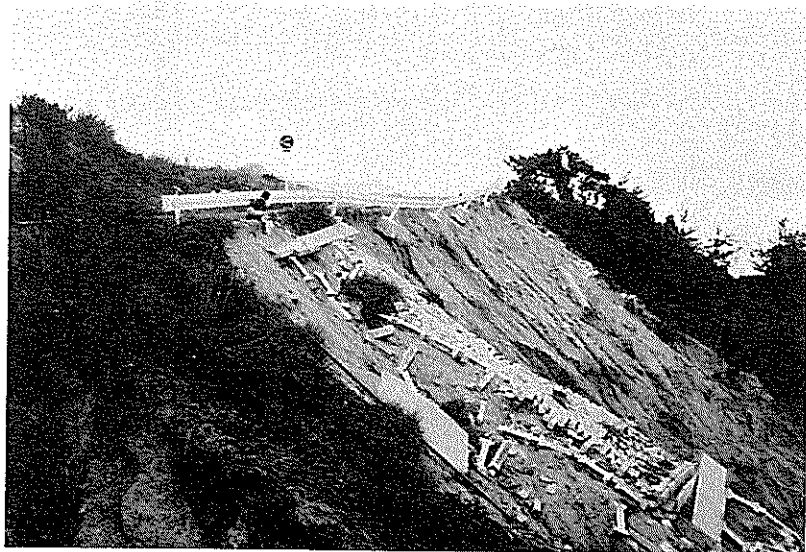
崩壊誘因

アブライトの不透水性により地下水位が上昇し、間隙水圧が増加、盛土と地山の境界をすべり面とする斜面崩壊と推定される。

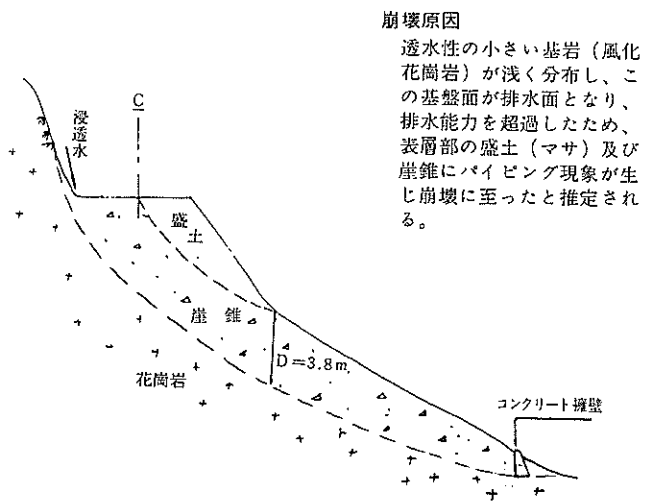


アブライト（半花崗岩）
花崗岩中の割れ目等に沿って新しい花崗岩マグマが貫入したもので、周辺は高温、高圧のため激しく圧砕される。またアブライト自身は、鉱物結晶が極めて緻密で硬いものとなる。

県道橋大角坂手港線 内海町北谷付近



横断模式図

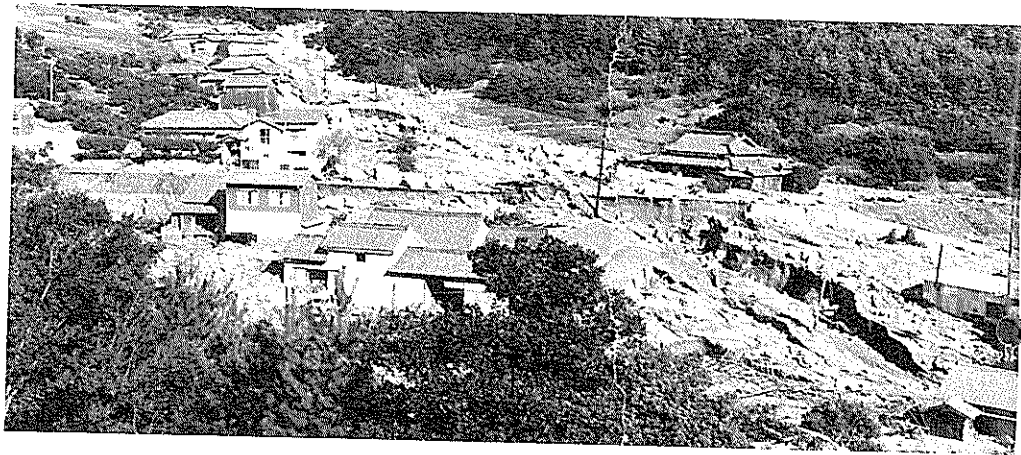


崩壊原因

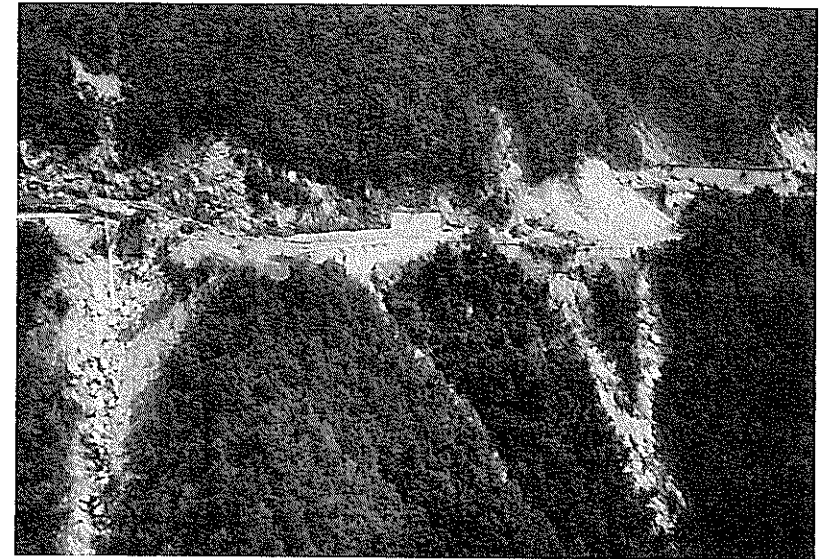
透水性の小さい基岩（風化花崗岩）が浅く分布し、この基盤面が排水面となり、排水能力を超過したため、表層部の盛土（マサ）及び崖錐にパイピング現象が生じ崩壊に至ったと推定される。



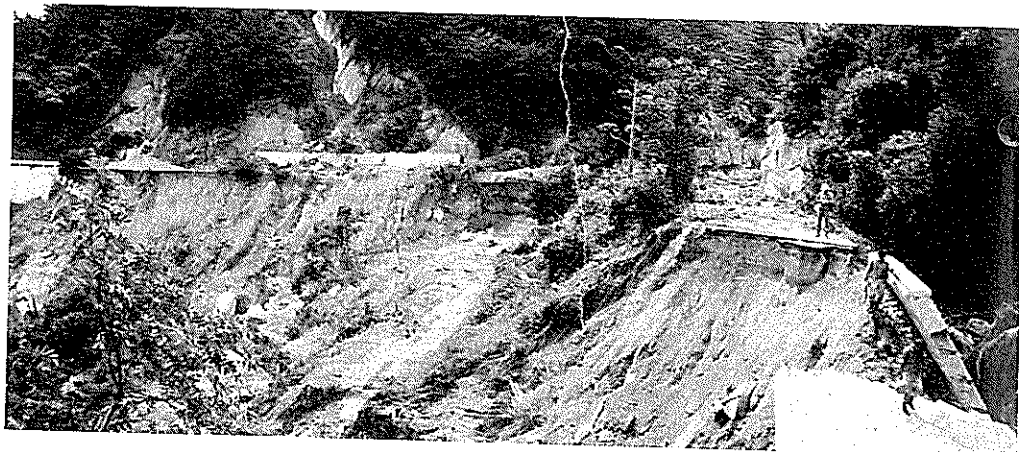
県道橋大角坂手港線（内海町大泊）



県道蒲野内海線（池田町石場）



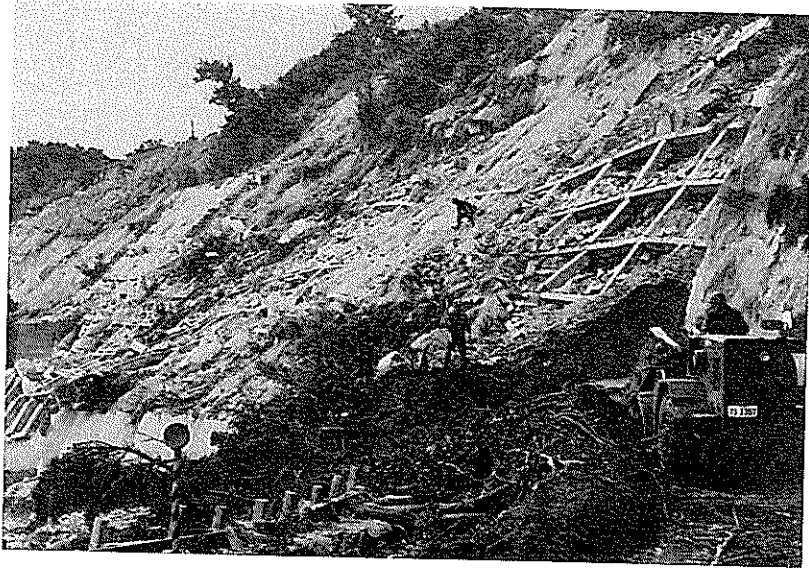
県道小豆島循環線



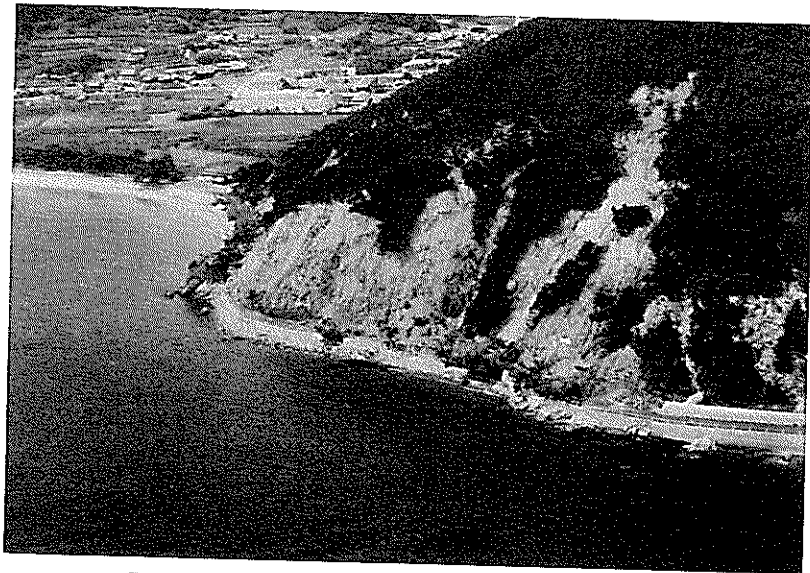
県道橘大角坂手港線（内海町徳本付近）



県道小豆島循環線（内海町藤崎付近）



県道三都港平木線（池田町目見ヶ谷）



県道蒲野内海線（池田町蒲野）